

書評 Catherine FUCHS (2014) 「La comparaison et son expression en français (フランス語における比較とその表現)」Editions Ophrys, p.207.

秋廣 尚恵

はじめに

本書は、フランス語学の様々な話題をその専門家が一般の読者に分かりやすく紹介することを目的として執筆したシリーズ、*L'Essentiel Français* (フランス語のエッセンス)の最新刊である¹。このシリーズにふさわしく、簡潔な構成、明快で平易な文体で書かれており、専門知識がない読者も気軽に読みとおすことが出来る文献である。

本書の記述の基盤となったのは、FUCHSの監督の下、LATTICE 国立科学研究所が作成した比較構文のデータベース *Structures comparatives du français* (フランス語の比較の構造)である。このデータベースは、現在、フランスで使用されている主だった規範文法書や辞書の中から比較表現 2476 例を集めたものである²。

比較表現に関しては、これまで、一般言語学、言語類型学、英語学の分野で取り上げられることが多かったものの、フランス語学の分野で、網羅的に扱った研究書はごく少数に留まる。その点で、本書は、フランス語の比較表現を記述した専門書として、フランス語学者にとっても、非常に価値がある文献である。

さて、本書は、3部構成で成り立っている。イントロダクションでは、認知的操作としての「比較」の定義、比較表現の分析の際に鍵となる幾つかの概念の定義と説明、そして、先行研究のまとめを行う。第一部では、比較表現のうち、「量的」な比較表現の分析、第二部においては、「質的」な比較表現の分析をする。また、第二部と第三部はさらに幾つかの章に分かれている。以下に各部の内容を簡潔にまとめる。それぞれの内容のまとめに対応する部分が本書に現われるページを()内に示す。

¹ FUCHS はこのシリーズの監修者を務めており、同シリーズから既に *L'ambiguïté du français* (フランス語の曖昧性) (1996年刊行)を出版している。

² このデータベースの一部が以下のサイトから無料で閲覧できる。www.lattice.cnrs.fr\$bdd-comp. ただしデータベース全体へのアクセスには登録が必要である。

イントロダクション:「比較」とはどのような概念か。

本書のイントロダクションは、まず、「比較」という認知的操作を心理学者や哲学者の諸説を引きながら定義することから始まる。「比較」が成り立つためには、比較すべき 2 つ(以上)の対象と、その対象同士を比較する何らかの共通特性があることが前提とされる。全く何の共通特性もない異質なものを比べることはそもそも不可能である(p.12)。

また、「比較」を言語によって明示できるようになるのは、母語習得の過程では、比較的遅く、6 歳から 7 歳になってからである。このことから、「比較」が、幼児にとって、「命名」や「記述描写」などの操作よりもはるかに高度な認知的操作であることが分かる(p.14)。しかしながら、「比較」はその後の日常生活の中で非常に重要で基本的な認知的操作の 1 つになる。人は常に「何か」を比較し続け、また「自分」を「別な時期や状況にある自分」や「他人」と比較し続けながら一生過ごしていく。(p.15)

FUCHS は、「比較」の操作が言語化されるにあたり、重要な鍵となる概念を、「les entités comparandes (比較される実体)」と、比較の基準を構成する「paramètre (パラメーター)」と定義する。さらに、比較される実体には、「standard (標準)」と、「comparé (比較されるもの)」の 2 つがあるという。例えば、「Pierre est plus grand que Paul (ピエールはポールより背が高い)」という比較文において、「standard (標準)」が Paul (ポール)、「comparé (比較されるもの)」が Pierre (ピエール)、「paramètre (パラメーター)」が être grand (背が高い)である。さらに、plus (より多くの)という副詞を「marqueur du paramètre (パラメーターのマーカ―)」、従属接続詞 que を「marqueur du standard (標準のマーカ―)」と定義する(p.22)。

第一部:「量的比較」について

第一部では、2 つ(以上)の要素同士を、ある特性をどの程度有しているかという点から、相対的に比べることによって、その間の非同等 (Inégalité) の関係、もしくは同等 (égalité) の関係を表すタイプの表現について論じている。

この比較は相対的なものである。従って、それぞれの要素がパラメーターの上では、どのような度合いを持つかということについては、絶対的には定められない (indéterminé)。例えば、「Pierre est plus grand que Paul. (ピエールはポールよりも背

が高い)」という例において、ピエールが本当に背の高いのか、それとも背が低いのかという点は分からない。「(ピエールもポールも背が低いのだが、ピエールの方がかろうじてポールより背が高い)」という解釈も十分に成り立つ (p.23)

第一章では、こうした相対的な「量的比較」を表す構文を以下の3つのタイプに分類する。①パラタックス構文: **Pierre est grand, Paul est petit** (ピエールは大きい、ポールは小さい) ②空間的表現: **Pierre est grand à côté de Paul** (ピエールはポールの傍らでは大きい) ③相対的な度合いの比較: **Pierre est plus grand que Paul** (ピエールはポールより大きい)。(p.25)

③はパラメーターをどう表現するかという観点から、さらに、3つのタイプに下位分類される。(A)2つの要素を従える名詞句: **La grandeur de Pierre dépasse la grandeur de Paul** (ピエールの背の高さはポールの背の高さを超える) (B)補足的要素として前置詞句で表される: **Pierre dépasse Paul quant à la grandeur** (ピエールは背の高さという点において、ポールを超える) (C)述語として表される: **Pierre est plus grand que Paul** (ピエールはポールよりも大きい)。FUCHS によれば、フランス語において最も標準的な「量的比較」の表現は③Cのタイプであるという(p.26)。

第二章では、③Cのタイプに属する様々な構文の例が挙げられ、さらに詳しく解説されている。③Cのタイプの構文は、度合いを表し、パラメーターのマーカ―となる副詞 (**plus, moins, davantage, autrement, aussi, autant, si, tant**) と比較される標準となる実体を導入するマーカ―である **que** を相関させることによって構成される。

ここでは、それぞれの副詞の意味の違い、そして従属接続詞 **que** の機能、**que** が導入する連辞的要素の多様性(語、句、節など)、また省略の問題について詳しく論じられている。例えば、**Pierre est plus grand que Paul** では、**que Paul** の後に **est grand** が省略されていると分析されている(p.61)。しかし、動詞のタイプによっては、省略しないものもある。命題内容を従える動詞やモダリティを表す動詞は省略されにくい。例えば、**Elle n'était pas aussi libre qu'elle le disait** (彼女は自分で言うほど自由ではなかった) (p.62)。

第三章に示されるように、③Cタイプに現われる構文には、必ずしもいつも2つの実体と1つのパラメーターがあるわけではない。「variable(変数)」を導入することで、ある実体を変数に関わるそれ自体と比較する場合 (**Pierre est plus gentil qu'hier**. ピエールは昨日より優しい: **hier** が変数。ピエールは昨日のピエールと比較されている) がある(p.78)。さらに、2つの実体と2つのパラメーターが並行的に比較される場合 (**Pierre boit plus que Paul ne mange** ピエールはポールが食べる以上に飲む) がある

(p.78)。また、最上の度合いを表す比較(L'amour est plus doux que le miel 愛は蜜よりも甘い)(p.80)や、概念の超越(C'est plus que beau それは美しい以上だ)(p.83)など、様々な多様な構文が可能である。

第4章では、標準的タイプに属さない非典型的なタイプとして、左方遊離構文: *Auant que son frère, Paul est sensible aux critiques*(兄(弟)同様に、ポールは批判を気にする)、右方遊離構文: *Pierre est aimable, plus que Paul*(ピエールは親切だ。ポール以上だ)、対称的相関構文: *Plus on est de fou, plus on rit*(気が狂えば狂うほど、笑うものだ)などが扱われている。

第二部:「質的比較」について

「質的比較」では、パラメーター上における度合いの相対的比較ではなく、主観的な選択に基づく比較を表現する。このタイプの比較は以下の3つのタイプに分類することが出来る。①客観的優位性(*valoir mieux A que B*:BよりもAのほうがいい)②主観的好み(*aimer mieux A que B*:BよりAを好む)③二者択一的結果(*plutôt A que B*:BというよりはむしろB)(p.107)

第5章では、この3つのタイプのそれぞれについて詳しく解説される。①客観的優位性を表す比較構文 *Un bon croquis vaut mieux qu'un long discours*(良質なデッサンの方が長いスピーチよりも良い)という文において、大切なことは、デッサンとスピーチのパラメーター(*valoir* 価値がある)の中での相対的度合いを比較することではなく、デッサン(簡潔で短い描写)の優位性そのものなのである。②主観的好み: *J'aime mieux un bon croquis qu'un long discours*(良質なデッサンを長いスピーチよりも好む)でも同様である。③二者択一的結果 *Plutôt souffrir que mourir*(死ぬくらいなら苦しむほうがいい)においても、問題となっているのは、*souffrir*(苦しむ)と *mourir*(死ぬ)を対比した結果 *souffrir*(苦しむ)を選択することなのであって、両者の相対的な度合いの差ということはいずれも問題になっていない。

第6章では、類似性の表現: *Marie est fraîche comme une rose*(マリーはバラのように初々しい)が扱われる。このタイプの表現のマーカースとして *comme, tel (que), ainsi (que), aussi (que)* などが扱われるが、とりわけ *comme* の様々な用法について実に詳しい解説がなされている。

第7章では、同一性と相違を表す2つの構文が扱われる。同一性を表すマーカース

は、*même (que)* である。例えば、*Cette année, je vais à la même piscine que l’an dernier*(今年、私は昨年と同じプールに行きます)。また、相違を表すマーカーは、*autre (que)* である。例えば、*Cette année, je vais à une autre piscine que l’an dernier*(今年、私は昨年とは別のプールに行きます)である。

おわりに

言語学な観点から見ると、比較表現の分類として、量的比較と質的比較を区別した点が興味深い。この区別の本質は、パラメーターとなる特性の語彙的な特徴の違いにもはっきりと現われているように思われる。量的比較においてはパラメーターとなる特性は、段階性を持つことが出来る形容詞や副詞の語彙に広く開かれているのに対し、質的比較においては、「優劣」もしくは「良し悪し」を表す語彙にのみ限られている。量的比較では、比較される実体そのものの特性というよりは、様々な特性を表すパラメーター上の相対的比較が重視されるのに対し、質的比較では、逆に、比較される 2 つの実体が持つ本来の性格の対比がむしろ重要視され、相対的な度合いの比較は(たとえそのような比較が論理的には成立するにせよ)重要視されてはいない。日本語に訳してしまえば、いずれのタイプの比較も「AはBよりも・・・」となってしまう、あまりその区別に注意をしたことはなかった。本書を読んで、2 つの異なるタイプの比較の区別に気づかされたことは新鮮な驚きである。

本書のもう 1 つの大きなメリットは、比較のパラメーターを構成する形容詞、副詞の分類や動詞表現、また、比較の基準を導入する従属接続詞や前置詞の様々な用法、さらに対称的相関構文や遊離構文といった様々な構文との関連について、パノラマ的に総覧できるということであろう。引用されている例はいずれも文法書や辞書から抜粋された規範例であり、それぞれが詳細な解説を伴っている。また、*plus* の発音の規則など、中上級の学習者にも是非教えるべき役立つ内容がまとめられている。フランス語教育者、また上級フランス語学習者にとっても、有益な参考文献となるだろう。

(東京外国語大学)